

「炭鉱のカナリア」は鳴きやんだまま

このままでは、時代は好転しない

その昔、米英の炭鉱で有毒ガスが発生した際に人間よりも先にカナリアが察知して鳴きやむことから、炭鉱労働者がカナリアを籠に入れて入坑するようになったという。その故事から、「炭鉱のカナリア」とは、何らかの危険が迫っていることを知らせてくれる前触れとして比喻され、現在の株式市場でも相場の変調を知らせる際に使われるようだ。

さて地球温暖化問題。

「炭鉱のカナリア」役を任ずる科学者からの警鐘で緊急課題となつてほぼ四、五十年、責任の押し付け合いで躊躇して世界の足並みが乱れ遅れている間に、世界の至るところでとんでもない異変が起きるようになって来た。

そして、日本でも温暖化に起因する異変も含めて生活を脅かす自然災害は、専門家の警告が弱いのか届かないのか「想定外」が日常化、教訓も生きていないこともあつてか？社会資本の防護や支援が後手後手となつて、この土地・この国に安心して住めなくなった。

今や、炭鉱のカナリア（日本流で言えば、※どがん奴雁のことか）は居ても、首長は耳を持たないのか存在しないも同然だ。

.....

一方、耳を貸さない首長は、今に始まつたことでない。

地球上にわが人類が誕生して二十五万年以上にもなるそうだが、手前勝手な権力を振るつて命を奪い合う極悪の歴史は延々と続いてやむことなく、すくなくとも身の安全を守る世の中にするぐらいの知恵は、搾り出せないものだろうか？

過去のことはともかく、現状で痛感することを、ただ一介の民として愚直に遠吠えしたい.....

「大事なことが、ごく一部で性急に運ばれているように思う。」

そこで、**急がば廻れ、万機公論に決すべしと願いたい。**

平たく言えば、

便利な利器のお蔭か、時間もスピードも早くなるばかりで、お互いの気持ちや意図を十分把握・伝達できないまま、広く意見も求めず、国家や組織の大事な判断を浅慮なものにし、結果、思わぬ方向へ導いてしまっていないだろうか、と。

カナリアが鳴いて安心できる世になる――

夢だろうか？

※「奴雁」は、仲間たちが餌をついばんでいる時に、不意の難に備えて首を高くし周囲に注意を払っている見張り役の雁のことで、福沢諭吉は「学者は国の奴雁なり」と説いている

